

2015年(平成27年)6月22日

病院長からの一言

～“da Vinch Special Award for Distinguished Hospital”～



弘前大学医学部
附属病院院長 藤 哲



2012年9月発行の『南塘だより第67号』で、2011年7月より東北・北海道で初めてとなる遠隔操作型内視鏡下手術支援システム“da Vinci Surgical System (以下ダ・ヴィンチ手術)”を導入したことを紹介しました。その後、保険収載された泌尿器科における前立腺摘出術症例の増加や、産科婦人科・消化器外科領域への応用もあり、本院では症例を積み重ねてきました。

本年1月には、このダ・ヴィンチ手術が300症例に到達しました。この度、本院が本邦では、4番目となる“da Vinch Special Award for Distinguished Hospital”を授与され、記念の盾をいただきました。今後は、教育病院施設として認定され、研修医の受け入れが可能となる予定です。

さて現在、腹腔鏡手術の不適切施行による特定機能病院取り消しの施設が出て、内視鏡手術自体が

危険な手技として矢面に立たされています。内視鏡手術の利点は、患者に優しい低侵襲な手術という点です。しかし、明らかに腹腔鏡下手術が適応の早期胃がんにおいても、開腹手術を希望する患者が増えているそうです。ダ・ヴィンチ手術も内視鏡手術の範疇に入りますが、内視鏡に比べ操作性に優れ、患者にもまた術者にも負担が少ない手技です。高齢社会に入った本邦では、このようなより侵襲の少ない治療方法を常に考慮する必要があります。大事なことは、このような医療技術を施行するにあたっては、手技の適応、倫理委



泌尿器科学講座教授大山先生(左側)と記念の盾と一緒に

員会での審査や医療安全への配慮などを十分検討するということが、極めて基本的なことです。本

院では、今後も基本を忘れることなく、特定機能病院の使命を果たしたいと考えています。

新任科長・センター長の自己紹介

救急科科長・高度救命救急センター長 山村 仁



平成27年4月1日付で、救急科長、高度救命救急センター長に就任いたしました。就任にあたり自己紹介を兼ねてご挨拶を申し上げます。

私は東京都出身で早稲田高等学校を卒業後、昭和58年に東京医科大学へ入学しました。大学卒業後は、救急医になることを志し大阪大学特殊救急部に入局しました。その当時の阪大特殊救急部は、外傷や熱傷症例が大阪全域から搬入されてきたため、数多くの外傷症例を経験するとともに最先端の救急診療を学ぶことができました。その後、沖縄県立那覇病院で一般外科の研修を行い、松戸市立病院の救急部に移りましたが、その在勤中に起きた阪神淡路大震災では、派遣医師として神戸市東灘区の被災地内で医療活動を行いました。また、同年3月に起きた東京地下鉄サリン事件では、数多くの中毒症例が病院に搬送され、その診療に従事しました。大阪大学では、阪神淡路大震災に関する調査を行うとともに侵襲と内分泌に関

する研究を行い、前任の大阪市立大学では救命救急センターの立ち上げに携わり、さまざまな教育プログラムや教育コースの開発を行いました。

弘前大学高度救命救急センターの使命として、三次救急医療施設としての診療体制の充実、常に災害医療ならびに被ばく医療に対応できる体制の整備があげられます。現在、地方の救急医療は救急医不足、救急診療ができる病院不足などで厳しい状況となっています。そのため、今後は地域救急医療の充実を図るためにも、内因・外因を問わない幅広い重症傷病者の受け入れが必要です。青森県にある医学部として、多くの人材育成の責務を果たすとともに救急医療の最後の砦として、県民の方々が安心して暮らせる救急医療体制の構築と救急医療の充実を図りたいと思います。今後も皆様方のご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

平成27年度体制スタート!

藤病院長の下、副病院長に消化器血液内科学講座 福田眞作教授、脳神経外科学講座 大熊洋揮教授、病院長補佐に総合医学教育学講座 加藤博之教授、皮膚科学講座 澤村大輔教授、泌尿器科学講座 大山力教授、看護部 小林朱実看護部長が引き続き務めます。



副病院長
福田 眞作
消化器血液内科学講座
教授



副病院長
大熊 洋揮
脳神経外科学講座
教授



病院長補佐
加藤 博之
総合診療医学講座
教授



病院長補佐
澤村 大輔
皮膚科学講座
教授



病院長補佐
大山 力
泌尿器科学講座
教授



病院長補佐
小林 朱実
看護部長

新任部長の自己紹介

医療技術部長 塚本 利昭



このたび、平成27年4月1日付けで医療技術部長を拝命いたしました塚本利昭と申します。任期は2年間となります。自己紹介をかねてご挨拶させていただきます。

私は八戸市出身で、高校卒業後は高知市にある理学療法士の養成校に入学いたしました。臨床実習は、高知医科大学(現：高知大学)をはじめ佐賀県と福岡県で行いました。1985年に養成校を卒業し、奈良市にある東大寺整肢園(現：東大寺福祉療育病院)に就職いたしました。「奈良の大仏様」で有名な東大寺の境内にある東大寺整肢園では脳性麻痺の子供さんや整形外科疾患に関わりました。その後は、天理市の高井病院でリハビリテーション科の立ち上げと外傷・脳血管障害・スポーツ障害の急性期に関わり、1991年に国立療養所岩木病院(現：国立病院機構青森病院)に参りました。岩木病院では筋ジストロフィーにおける筋力評価法や運動機能及び本学出身の整形外科医、大竹進医師が日本で初めて神経筋疾患に対して導入した鼻マスクによる間歇的陽圧

換気(NIPPV)の普及と研究に関わることができました。1997年から本院へ割愛にて赴任し、臨床では投球障害肩や野球肘、膝前十字靭帯損傷などのスポーツ障害に関わり、基礎では社会医学講座の研究生としても9年間在籍し、岩木健康増進プロジェクトにも10年間関わって参りました。

これからまだまだ臨床に携わってきたいという思いは強くあるものの、「必要とされるところで動く」ということが、これまで臨床でお世話になってきた方々への恩返しであり、また私自身の矜持でもありますので、検査部門、放射線部門、臨床工学・技術部門、そしてリハビリテーション部門の4部門(総数129名)が、関係する診療科をはじめ関係各位の信頼に足る専門職として協働できるよう、医療技術部長としてこれまでの経験を生かし運営して参りたいと考えております。今後とも、ご教示ご協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

各診療科等の紹介

【腫瘍内科】

腫瘍学を専門にしている医師をoncologistと呼びます。特に、薬物療法を専門とするoncologistをmedical oncologist(腫瘍内科医)と呼びます。私たち診療科は、腫瘍内科医として、がん医療を担当します。飛躍的進歩を遂げた腫瘍学は、がんを分子生物学的視点から異なる臓器腫瘍の共通性を解明し、臓器横断的な診療を必要としました。そして、日々開発される新規薬剤は専門的知識と専門的技術の習熟を要し、専門的医療職の総合的な協力を必要としました。これはチーム医療と呼ばれるものです。また診療対象となる多くのがん患者は治癒が望めない状況で、真摯に限られた生と向かい合って日々を過ごされています。私たちは、患者さんの診断から看取りまでの臨床経過を連続的に関わることを求められています。私たちは、臓器横断、職種縦

断、そして患者さんの時間軸といった立体的な広いフィールドで、常に科学的進歩に携わり、そして常に人間的なかかわりをもった診療を行っております。実際は、大変な労力が必要です。けれども、それに見合うものを患者さん自身から頂くことが多く、とてもやりがいのある仕事です。具体的には、臨床試験による新規薬剤の開発に力を入れています。様々な苦痛を抱える患者さんと日々深くかかわり、心身両面から支援をしております。毎週2日キャンサーボード開催を放射線科、緩和ケア医、関係部署と連携して担当しています。最近、地域のがん医療への貢献として何ができるかについて、関係する看護師、薬剤師、病院事務職員らが一緒になって話し合う場が多くなりました。みんな協力した努力が始まっております。



す。教室のモットーは、一に楽しく、二に謙虚に、そして三にどん欲に、です。楽しい職場で、それぞれが人間的に成長し、そしてどん欲に学問を学んでいこうということ。また、医師3名、講座受付事務1名、CRC1名の小さな構成ですが、将来に向けて大きな希望を抱いております。これは、私たちだけでできる仕事ではありません。開設当初から支援をして下さっている消化器内科、血液内科、膠原病内科の先生方、外来棟のメディカルスタッフの皆さん、さらには医学部関係者並びに附属病院各診療科、看護部、薬剤部をはじめ、各部署の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。(腫瘍内科 佐藤 温)

先憂後楽

専門医制度改革のこと



耳鼻咽喉科科長 松原 篤

皆様もご存じとは思いますが、いよいよ専門医制度が大きく変わります。これまで専門医はいろいろな学会ごとに認定していたわけですが、平成28年度からは認定する組織が日本専門医機構に統一されることになっています。現在は、まだ準備段階として制度設計の最中のようなので、具体的な制度がどう変わるかは診療科により異なると思いますが、たとえば耳鼻咽喉科の場合には、従来であれば学会出席だけで単位を取得し、専門医の更新が可能であったもの

が、これからは診療実績としてかなりの数(5年間で200症例以上)の経験症例の提出が必要となります。他にも、専門医共通講習として医療安全講習会、感染対策講習会、医療倫理講習会などの受講が義務化されることになる、など。

また、これから新しく専門医を目指す研修医(専攻医というそうです)のために、各々の認定研修施設で、〇〇コースや□△コースなどのいくつかのコースからなる施設独自のプログラムを作成して

ホームページ上に公開することになります。つまり、専攻医から選んでもらうためには魅力あるプログラムを作ってPRする作業が必要になるわけです。現在、耳鼻咽喉科では弘前大学病院を基幹として、青森県立中央病院などを関連施設とするプログラムの作成に取り掛かっており、頭をひねっている最中です。

さて、このような具体的な話を5月下旬の日本耳鼻咽喉科学会総会の会議の折に聞いてきましたが、その総会で、本学出身の信州

大学耳鼻咽喉科教授の宇佐美先生が「宿題報告」の発表をなさっていました。ちょっと古めかしく感じるかもしれませんが、耳鼻咽喉科では年間に2大学だけ特別な研究テーマを定めて、主任教授が講座の研究成果を代表して特別な講演を行います。選ばれるのは全国80大学のうちの2大学だけです。とても名誉なことです。講演のタイトルは「難聴の遺伝子診断とその社会的貢献」で、素晴らしい御講演でした。ここに敬意をもって講演の成功を報告いたします。

総合患者支援センター設置



申すまでもなく本院は県内唯一の特定機能病院として、そして地域医療における最後の砦として高度急性期医療を担当しています。この本院の機能を十二分に発揮するために患者さんの退院支援や在宅支援を行うことを目的に、平成18年に地域連携室を設置しました。しかし、第6次医療法改正では、明確な地域ビジョンが提示される予定であり、平成26年度の診療報酬改正では、在宅復帰率が入院基本料施設基準に組み入れられるなど、在宅医療や介護など地域包括ケアの強化が必要な状況になっています。そこで、患者さんの入院から退院、外来通院に至る様々な

支援を効率よく実行できるような体制を強化するために「総合患者支援センター」を設置することになりました。総合患者支援センターは、総合医療相談部門、入退院支援部門、外来予約支援部門、肝疾患診療相談支援部門の4つの部門で構成されています。昨年9月に設置準備委員会を組織して、本年4月の設立に向けて鋭意準備を進めてきました。センター全体としての本格的な稼働はまだ先になりますが、業務内容を充実させながら順次活動の範囲を広げていく予定です。「総合患者支援センター」は患者サービスのさらなる向上と効率の良い地域連携を目指しておりますので、皆様のご理解とご支援を賜りたくお願い申し上げます。(総合患者支援センター長 大山 カ)

SCU設置及び女性医師支援施設開設竣工式を開催

弘前大学医学部附属病院では、平成27年3月30日、かねてより建設中のSCU(脳卒中集中治療室)及び女性医師支援施設の完成を記念して竣工式を執り行いました。両施設は、平成25年度青森県地域医療再生計画において、脳卒中医療機能強化整備事業としてSCU6床の整備が、女性医師等勤務環境整備事業として女性医師職場復帰支援施設の整備が策定され

たことにより、青森県から事業費の一部を補助いただき設置したものです。竣工式では、初めに藤哲病院長が「両施設の設置により、高度な医療の提供と充実、女性医師の勤務環境整備が図られることで、青森県唯一の特定機能病院として、また、地域医療における最後の砦として、今後も努力していきたい」と式辞を述べ、続いて佐藤敬学長の挨拶、三村申吾青森県知事が祝



第53回全国国立大学臨床検査技師会総会 第15回全国国立大学病院臨床検査技師長会を開催

去る4月23、24日の二日間にわたり第53回全国国立大学臨床検査技師会総会・第15回全国国立大学病院臨床検査技師長会を本院検査部が当番校となり、ホテル

ニューキャッスルで開催致しました。この会議は例年5月に開催されておりますが、4月25日に日本臨床検査自動化学会春季セミナーという全国規模のセミナーを臨床検査医学講座と検査部で開催することが決まっていた為、参加者を増やす目的と日本一の桜を見ていただきたいとの思いでこの会期に決定いたしました。開催が近づくにつれ、開花状況が気になり毎日、ホームページでチェックしておりましたが、結果的に、この上ないタイミングでの開催となりました。会に先立ちまして藤哲病院長よりご挨拶を賜り、特別講演として文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室の齋藤雅彦第二係長より「大学病院を取り巻く諸課題について」、また検査部長の菅場広之先生には「大学病院検査部と地域貢献一感



看護実践活動報告ポスター展示

看護部では、日頃の看護実践の成果を共有し、看護実践力をレベルアップすることを目的として、「看護実践活動報告会」を平成15年度から実施してきました。平成26年度は「～絆～看護実践のシェアリング」のテーマに52題の応募があり、報告会を開催しました。その中から7題ずつ2週間で入れ替え、計42題を3月18日から6月9日まで外来診療棟エレベーター前に展示しました。例年、看護部内のみでの報告会でしたが、患者さんご家族の皆様、病院職員の方にもご覧いただきたく、初めての試みでした。今後も看護部の実践を広く皆様にもお知らせしていきたいと思っております。皆様のご助言・ご感想をお待ちしております。(看護部)



平成26年度ベスト研修医賞選考会開催

平成26年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、平成27年2月19日、医学部臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度の卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり、今回で11回目を迎えます。当日は、あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた、藤弘幸先生、高橋和久先生、藤岡一太郎先生(五十首順)の3名の研修医が、「ここがポイント!研修医の心がけ」と題し、自分が研修生活の中で重視してきた事柄について、一人10分間ずつスピーチを行ないました。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した学生諸君による投票が行なわれました。投票の結果、藤岡一太郎先生が平成26年度ベスト研修医に選ばれました。引き続き表彰式が行われ、藤岡先生に賞状、純銀製メダル、記念品が、佐藤先生、高橋先生には優秀研修医賞として賞状、楯、記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として、柞木田なつみ先生に「ベスト



藤病院長と共に、ベスト研修医賞、優秀研修医賞の先生方

パートナー賞」、赤石真啓先生に「レポート大賞」、山中春光先生に「セミナー賞」、藤岡先生と赤石先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。つづいて懇親会に移り、5年生から恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われ、会場は大いに盛り上がりました。当日は58名の学生諸君に加え教職員も多数の参加があり、教職員、研修医、学生がみな、この1年の研修や臨床実習の思い出について心ゆくまで語り合い盛会裏に終了しました。医師は「人と人の絆」の中でしか育ちませんが、本賞がこれからも、研修医・教職員・学生の絆を強固なものするために貢献してくれることを期待しています。(卒後臨床研修センター長 加藤博之)

「看護の日」に寄せて

今年も「看護の日」「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに5月10日から16日看護週間が開催されました。

看護の日の制定は、21世紀の高齢社会を支えていくためには、看護の心、ケアの心、助け合いの心を一人一人が分かち合うことが必要で、こうした心を誰もが育むきっかけとなるよう、旧厚生省により1990年に制定され、市民・有識者による「看護の日の制定を願う会」の運動が、きっかけでした。看護部では、記念行事として「看護の日のお花」を展示し、今年「花のドレス」がエントランスに飾られ、色鮮やかな花々のドレスをまとった淑女が、患者さんご家族や病院勤務者を出迎え、見送り、そして見守っていました。

ライトボックスには、お産に関連した妊娠速算器、トラウベ(胎児心音を聴取する器具)、骨盤計、臍帯箱を展示し、助産師の仕事アピールさせて頂きました。恒例となったメッセージカード

は、「太陽と月」をイメージしパステルシャインアートで描かれ、ほのぼのと温かみのあるデザインとなり、5月12日に入院患者さん一人一人に看護師たちが、心をこめてメッセージを書きお渡ししました。患者さんから「涙が出そうなおもしろい」「うれしくて何度も読み返した」など感謝と励ましの言葉を頂き、今後も、優しさと思いやりのある、安心・安全でより良い看護を提供していきたいという思いを一層強く抱きました。(第二病棟3階 成田幸子)



病院へのご寄附のご案内

本院では、最先端の医療機器の導入、医療スタッフの育成、患者サービスの向上・院内環境の整備など附属病院の運営のために、皆様から寄附金を受け入れています。

詳しくは、経理調達課経理調達グループ経理担当又は、外来診療棟1階⑦患者相談窓口までお問い合わせください。なお、病院のホームページでもご覧いただけます。(経理調達課)

【編集後記】

南塘だより第78号をお届けします。原稿をお寄せいただきました皆様には、心から感謝申し上げます。附属病院の運営には大学本部との調整が必要で、しばらく時間がかりましたが、医師の時間外等の手当がこの4月より実施に漕ぎ着けました。金額としてはさほど多くはありませんが、病院の取り組み姿勢として必要な事でしょう。また、待遇とは別に、機器、環境、人員配置等も重要で、少しずつですが進んでいるように思います。

「花燃ゆ」という幕末の長州を舞台としたNHK大河ドラマが放送されていますが、変わる事の難しさ、若者の意欲の重要さが伺われます。皆様方の意欲が増すように病院としても取り組んでいきたいと思っておりますが、建設的なご意見を頂き、共に更なる発展を目指しましょう!(病院広報委員 M.D.)